ちょオ女性、右上腹部痛
↓
胆石による急性胆のう炎
↓
超音波!!

ポリープ
ほぼ良性だが、まれに大きくなるので、
2,3ヶ月後に超音波。

リスクとコストが
少ないものから
行うべき!!

各種画像診断法の特徴・限界・リスク・コスト

	特徴	適応(第1選択)／限界	リスク	コスト
単純X線	X線 アナログ投影像 (デジタル投影像)	・骨折、イレウス、消化管穿孔、胸部 ・像の重なり(合成像)大きい ・濃度分解能が低い	小: X線被曝	小
CT	X線 デジタル断層像 CT下生検	・胸部～上腹部～骨盤、急性腹症、出血 ・partial volume effect ・同時性なし ・連続撮像が制限される	中: X線被曝 (造影剤)	中
MRI	磁気、電磁波 デジタル断層像	・頭部、骨格系、婦人科系 ・禁忌(ペースメーカーなど)あり ・ partial volume effect ・検査時間が長い ・撮像範囲が制限される	小: 誘導電流 熱エネルギー (造影剤)	中
US	超音波 デジタル断層像 US下生検など	・上腹部～骨盤、急性腹症(胆石など) ・客観性に乏しい ・空気・骨の存在する所は対象外	無	小
血管造影	X線 デジタル投影像 (アナログ投影像) IVR:血管内手術	・脳動脈瘤、緊急止血 ・侵襲大 ・要入院	大: X線被曝 造影剤 血管損傷	大

超音波

5

放射線診断における看護

- **検査前**
  1. 説明と同意書(IC);検査自体および造影剤
  2. 検査に対する不安の除去
  3. 前処置、前投薬
  4. 検査器具等の準備
- **検査中**
  1. 全身状態の把握
  2. 苦痛の軽減
  3. 合併症・副作用への対応(造影剤含む)
- **検査後**
  1. 合併症・副作用への対応(造影剤含む)
  2. 安静および解除

6

肺/大腸/男ガン(タタ)

臨床問題 以下の文章で正しいものを選べ

1. 血管造影の介助の際には、不足の事態に迅速に対応するために、検査室の中で、患者の脇に常にいるべきである。
2. 超音波検査の介助の際には、超音波は3次元的に拡がるため、なるべく患者の傍から離れるべきである。 →超音波にリスクは全くないため。
3. MRI検査で患者をストレッチャーなどで検査室に搬送する際には、検査中でなければ金属物に注意する必要はない。 →MRIは地波と電地波が出てるが、地波はズーーっと出ている。電地波は検査中のみ。
4. 核医学検査を受けた患者の体内から放出される放射線は非常に微量であるため、患者を特別扱いする必要はない。
5. X線を曝射中でなければ、X線検査室の中で被曝する可能性はない。

MRIに
ペースメーカーを
つけてる人は入っちゃ×!!

7

MRIは検査後も注意!!
X線の検査後はOK!!